嬉しくて泣く人を初めて見たのは、私が 5 歳のときだった。老人ホームから帰ってくるなり、「知らないおばあちゃんが泣いていた」と、私は母に報告したらしい。

もう 20 年ほど前の話である。保育園のみんなで老人ホームを訪問することになり、私たちはお歌や楽器を練習していた。訪問の日、保育園でお昼ご飯を食べたあと、みんなで歩いて老人ホームへ行った。楽器は自分で持つんだよと言われ、私は小さなトライアングルをリュックに入れた。私はトライアングルが嫌いだった。なぜなら、保育園の楽器の中で一番音が小さかったからだ。お友だちはみんな、鍵盤ハーモニカやカスタネット、シンバルなど大きな音が出る楽器を担当していた。先生は老人ホームにはいろんなおじいちゃんおばあちゃんがいること、中には歩くのが難しかったり耳が聞こえにくくなっている人もいることを教えてくれた。それじゃあ、私のトライアングルは、誰も聞こえない。そんなのつまんないな。私は老人ホームへ行くのが、ちょっぴり嫌だった。

到着すると、たくさんのおじいちゃんやおばあちゃんが迎えてくれた。少しドキドキしながら、毎日練習した「小さな世界」と「翼をください」を披露した。トライアングルの出番は、たったの数回。一生懸命に演奏する友だちをよそに、私はじいっとおじいちゃんおばあちゃんたちを見ていた。ふと、目の前にいる、車いすの小さなおばあちゃんがにこにこしながら泣いていることに気がついた。どうして泣いているのだろう。そのおばあちゃんを見ながら、私はちりんとトライアングルを鳴らした。

帰り際、お別れのあいさつをして帰ろうとしたら、あのおばあちゃんが私に近寄ってきてこう言った。

「きれいな音だったねえ」

私はびっくりした。私の音が、聞こえていたんだ。嬉しくて嬉しくてたまらなかった。トライアングルが少しだけ好きになった。

お迎えに来た母を見るなり、私は「知らないおばあちゃんが泣いていた」と報告した。母はにこっと微笑み、「嬉しかったんだねえ」と言った。嬉しくても泣くことがあるのだ。おばあちゃんが喜んでくれてよかった、と思った。その後、何度も演奏をしに訪問を行ったが、あのおばあちゃんに会うことはもうなかった。それでも私はトライアングルを鳴らした。小さな音でも喜んでくれる人がいるのだ。おばあちゃんの笑顔と涙が、5 歳の私を強く、優しく、豊かに成長させてくれた。